

戦後70年

毎年、八月がくると小学生の時、担任（確か三年と四年）の先生が毎年読んでくれた「八月がくるたびに」という本を思い出します。長崎で被爆した少女のお話ですが、怖いというその印象は今だに強烈に残っています。決してくり返さないために、八月は誰しも思い出し、振り返らなければならぬ「戦争」という事実。

折りしも戦後70年、節目の年。日本の将来に大きく関わる重要な安保法案が決まりつつあります。大切なことは「日本の安全は日本自身が守る」ということ。憲法解釈が問われるたいへんに重要な問題です。

そう遠くない70年前、実際にどんなことがあったのか。数少ない体験者がいらつしやるうちに、私たちは今一度、事実をしつかりと学ばなければなりません。



2010年、念願だった鹿児島・知覧を訪れることができました。

特攻隊員のあの多くの手紙（遺書）たちはただただ涙を誘うものばかり…。言葉にならない時間、ひとときを過ごしました。

多くは小さい頃面倒をかけ、親孝行でできなかったことのお詫びと、今からお国のために立派に征きます！との宣言の内容でした。「いく」は「征く」と書くそうです。そして、気づいたのは、「母親」宛てに書いた方が多いこと。残念ながら、すべてを読み通す時間がなかったのですが、二通の手紙が特に心に残りました。

一つ目。小さい頃から育ててもらった継母宛てで、とうとう「お母さん」と呼べる

かったお詫び、そして、立派に散つてきますと力強く宣言し、「最後に言わせて下さい、お母さん、お母さん、お母さん」と結ばれていました。

二つ目。その手紙は、遺してゆく小さい二人の子どもたち宛でした。父が果たすことからのこと、そして、父がずっと見守っているの、二人が仲良くして家族を支え立派な大人になるように、と二人が読めるように全てカタカナで書かれていました。読んでいて涙があふれてきました。

館内のボランティアさんのお話もとても心に残りました。戦争経験者であろうご年配の方は、生き残った者として伝え残す使命感からか、修学旅行の団体の子どもたちに向けて事実をしつかりと語っていました。

特攻に旅立つ若者は二度覚悟をしたそうです。一度目は、特攻で戦闘機に乗り込む際に最後に地面から足を離した時。

そして、もう一度は、飛び立ってから後ろを振り返った時。最初は形の良い開聞岳が綺麗に見えるのですが、ついに見えなくなった瞬間、その時に「もう二度と日本には帰れない！」と覚悟をしたのだそうです。

かけがえない多くの若き命の犠牲の上に、有難く現在の平和な私たちの暮らし、幸せがある。「人生に迷ったら知覧に行け」という、永松茂久さんの著書もあります。知覧には時間をとって、あらためてじっくりと伺いたいと思います。

亡き父の戦争体験

うちの父は昨年他界しましたが、今から六年前の夏休み、新潟へ家族で帰省した折、父から新たな戦時中の話を聞きました。

（私の父は、11歳の時に父親が戦死、自身も15歳で赤紙がきて出陣のち訓練段階の数ヶ月で終戦）

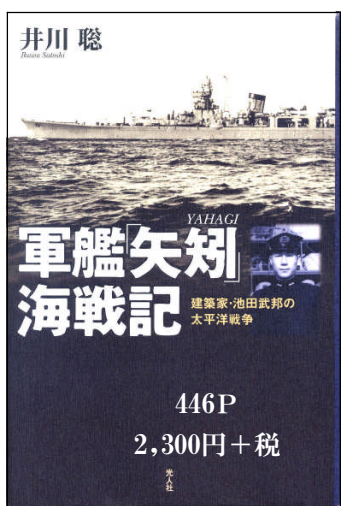
私の子どもたち（孫）にもと、一緒にいる時に貴重な多くのことを語ってくれて、今思えば本当に有難かったです。

戦死の知らせの電報を見せてもらいました。お祖父さんに連れられて汽車に乗り、亡骸を引き取りに行ってきたそうです。

翌年には、全国の戦争遺児が靖国神社に招集。大勢の新潟県遺児全員の集合写真が

ありました。天皇陛下が通られる時に、万頭を上げて見てしまったら「目がつぶれる！」と厳しく言われ、もちろん信じていたそうです…。

出征後、海軍の訓練では片手に白飯、片手にお汁を持って「匍匐（ほふく）前進」というのがあり、競って負けると食事抜き！というのがあったそうです。全く信じられないお話でした。今は亡き父の貴重な体験談、ずっと大切にしていきたいと思えます。



『軍艦「矢矧」海戦記』（井川聡著）

戦艦大和とともに鹿児島県坊津沖に沈んだ日本海軍が誇った最新鋭の軽巡洋艦「矢矧」の建築家・池田武邦の太平洋戦争、

軍艦「大和」とともに沈んだ軽巡洋艦「矢矧（やはぎ）」を知っていますか？

音楽表現家・五感育心考案・音楽道「笑顔塾」主宰の秋山千鶴さんとFacebookにて有難いご縁をいただき、このノンフィクションの感動大作、長編書籍に出会いました。

戦争中、兵学校卒の士官として軽巡洋艦「矢矧」に乗り組み、マリアナ沖海戦、レイテ沖海戦、そして沖縄海上特攻に従軍した21歳の海軍士官、主人公の池田武邦さんは、戦後ハウスステンボスや超高層ビル群の設計など手がけた著名な建築家。矢矧に乗艦し日本が誇る二大戦艦、「武蔵」・「大和」の最期を見届けた数少ない証人です。海戦の体験談をこれだけ詳細に語る人は、もはやほとんどいないかもしれません。

秋山さんはこの書籍に出会い、主人公池田武邦さんから自分の歌にエールをいただき、CD「あいのしらべ」の誕生につながったそうです。（読売新聞西部本社版に大きく掲載されました。CD購入等詳細はサイトにて「ひらほく新聞」で検索）

秋山さんの歌う『海ゆかば』や『加藤隼戦闘隊歌』『純忠菊池（西郷さんご先祖）の歌』などを聴いたあと、『矢矧』を熱く読み進むうち、乗組員の船上水葬の際、「海ゆかば」のラップで全員拳手の礼の場面など、何度も涙し、胸が締めつけられました。

著者・井川聡さんは、読売新聞社社員。近年話題になった「永遠の0」はあくまでフィクション。事実に基づき、ありのままに表現された『矢矧』の鬼気迫る物凄い迫力、壮絶な戦闘シーンの描写は実に素晴らしい、長編ですが一気に拝読しました。

生死を超越した戦い。大切な我が日本、愛する人々を守るため、あの連合艦隊を動かし強大な敵に立ち向かった二十歳前後の若者たち。自らの意志で立派に戦い、死んでいった。決して無駄ではない死。そして生き残った者の苦悩と責任…。経験のない私たちには決して計り知れない、重く、深い、すさまじい世界が描かれていました。

以下、終章より

「明日は死ぬかもしれない、ああ今日は生きていた。そういう毎日を経験したことのない人に、実感を伝えるのは無理だ」「敗戦後、何千年も続いてきた伝統文化が紙くずのように捨てられた。現代の日本人は、日本人の顔はしていても、日本人ではない」

それでも私はしつこく池田さん宅に通った。そして池田さんも根負けされたらしくいつしか、「こういう話をするのは初めてだよ」と言って、たくさんの逸話を聞かせてもらえるようになった。

私は、池田さんのこの言葉に思わず膝を打った。

「戦後、僕は、超高層ビルにチャレンジしたり、ハウスステンボス建設に携わったり、いろいろとやってきた。

けれど、その前の兵学校入学から（矢矧沈没まで）の五年間の方がずっと深みがあるんだ。特にその後半の二年足らずの戦争は、僕の人生にとって、戦後の60年よりずっとウエートが大きい」

人生は時間の長さではなく、質、というわけだ。世代の壁を越えて心を通わすことができたのは、こういう人生観、死生観が合致していたからだろう。（おわり）

戦後70年の今年は、終戦記念日を中心にNHKや民放各社が特番を集中編成。その中の一つを紹介しよう。

総合 8月11日19時30分からの「アニメドキュメント あの日、僕らは戦場で」少年兵の告白」は、アニメとドキュメンタリー

の融合の異色作。戦時下、子どもが軍に利用されていった知られざる歴史を伝える。夏休みに家族で見てもらおうというアニメ演出で「故郷や家族を守るためと洗脳されると、戦闘行為に対する善悪の判断がつかない状態になる。普通の子どもたちが、どのように兵士に仕立てられていくか。その恐ろしい過程を伝えたい」という内容。

少年兵は約千人実在したとされるが、既に多くが他界し、健在でも口を開きたがらない人が少なくなかった。しかし、「戦後70年の節目だからこそ、自分たちの体験を記録してほしい」と、終戦当時14、17歳の30人余が取材に協力してくれたという。

アニメ部分は、沖縄北部の山岳地帯で米軍と戦った元少年ゲリラ兵の悲惨な戦闘体験を基に制作。さらに証言や未公開の資料から、全国各地で少年たちによるゲリラ部隊が計画され、訓練が進められたことをドキュメンタリーで明らかにする。

今回の取材を担当した沖縄放送局の渡辺摩央ディレクターは「戦争に行かされた少年たちは、戦後70年、ずっと心の傷を抱え続けている。戦時中の被害と戦後の被害の両方を伝えたい」と訴える。

今理織ディレクターも「国民を守るはずが、子どもを最前線に送り出して殺し合いをさせる。（少年兵問題には）戦争の矛盾が象徴的に表れている。同じことは現在も世界で起きており、番組を通じて戦争の本質がわかるはず」と力を込める。以上

生死の経験を語る人がいなくなったあと、もしも語り継ぐ人がいなくなったら

本場の敗戦国となってしまう

語り継ぐ責任

日本の未来を担う

子どもたちのために